

# 大学礼拝

CHAPEL NEWS, No.131

2014年12月15日

クリスマス特集号



宗教部長 佐々木 哲夫

「確かな認識」

あの方は栄え、  
わたしは衰えねばならない。



自分と同じ分野の仕事  
を始めた年下の親戚が、自  
分よりも人気を集めるな  
らば、嫉妬に駆られてしま  
うことでしょう。

洗礼者ヨハネよりも半  
年下の親戚だったイエスキ  
リストは、三〇歳の時、ヨル  
ダン川で洗礼を受ける活  
動を始めました。

ヨハネの弟子は、「あの人  
が、洗礼を授けています。  
みんながあの人の方へ行っ  
ています」と告げました。  
まさに嫉妬に駆られてし  
まう緊迫した状況でし  
た。しかし、洗礼者ヨハネ  
は、驚くべき言葉を告げた  
のです。

「天から与えられなければ、人は何も受けることが  
できない。…花嫁を迎える  
のは花婿だ。花婿の介添  
え人はそばに立って耳を傾  
け、花婿の声が聞こえると  
大いに喜ぶ。だから、わた  
しは喜びで満たされてい

る。あの方は栄え、わたし  
は衰えねばならない。」

(ヨハネ福音書三二七〜三〇)

洗礼者ヨハネは、イエスキ  
リストの到来によって、自分  
が何者であり、どのように  
生きるべきかを明確に認  
識できたのです。換言する  
ならば、イエスキリストの  
誕生は、確かな自己認識の  
基準となったのです。預言  
者たちが待望し、博士や羊  
飼いたちが訪れ、洗礼者ヨ  
ハネが証したイエスキリス  
トの誕生は、新しい価値観  
の到来でした。

二〇一四年のクリスマスを  
迎えています。新しい価値  
観を与えたイエスキリスト  
の誕生をお祝いしたいと思います。



# クリスマス - 暗闇の中で輝く光 -



院長  
星宮 望

子・救い主がお生まれになった、すなわち全ての人を照らすまことの光が世にきたことの意味を考えてみましょう。

クリスマスの季節がまいりました。クリスマスとは、われわれ人類の救い主としてのイエス・キリストの生誕をお祝いするものであることはよく知られています。キリスト教国でない日本においても、どういふわけかクリスマスを楽しみにしているひと、祝うひとが多々いようですが、その意味・意義を理解している方が少ないように思います。東北学院大学に学ぶ学生諸君は、毎日の大学礼拝を通じてその意味・意義を理解していることと思います。ここでは、改めてクリスマスが神の御

覚えていらっしゃる方々も多いと思います。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災の当日の夜を覚えている方々も多いと思います。大学では全学の教授が土樋キャンパスに集まって年度最後の全学教授会を開催していました。当時、学長であった私は即座に会議を中断し、緊急避難・連絡体制に入りました。多くの教職員とともに夜遅くまで種々の対応に追われて、一段落してから夜道を徒歩で自宅まで帰りました。帰宅できない多くの方々に毛布や食料品を配布するために自宅に帰れる人は徒歩でも帰ることにしたからです。この晩には、電力供給が停止していましたので、大きな国道も、普通に利用している県道も明かりが全くない、暗

闇の世界でした。その中を時々自動車を通るので、危険防止のために手持ちの白いタオルを手で大きく振り回して歩行していることを運転者に示して道路を渡りました。この闇夜の中を歩いていたときに、気がついてみると空には満天の星がきらきらと輝いていてそれは見事なものでした。改めて、真っ暗闇になってみると、光を見ることが意識することが出来ることに気がつきました。

この小さな経験以上に、東日本大震災の衝撃の中で多くの人が苦難・困難の暗闇の中に、これまで思ってもいなかった小さな光のありがたさ、素晴らしさに気がついたのではないのでしょうか？そして、多くの困難な生活の中にあつて、確かな希望をどこに見出したらよいかを求め続けている方々も多いと思います。人間の作り出すものは必ずしも確かな希望に結びつくとは限りません。東日本大震災のような想定をこえ

る究極の災難の中での確かな希望は、自分たちの力で作り出せることではなく、神様からの恵みからではないでしょうか？言い換えれば、「われわれ人間が、尊大になつてしまい、神様の御心から離れてしまったことによつて引き起こされた暗闇の世界にいる我々に、光(救い主)を与えてくださつた」ということをクリスマスにあつて思うのであります。

改めて、救い主イエス・キリストの誕生は、すべての人を照らすまことの光が世に来たこととして聖書が告げている(ヨハネ1:9)ことを感謝して受け止めたいと思います。







あたたか  
温かく美しい

ひかり  
光のなかへ

村上 みか



「高い所からあけほの光が我らを訪れ、  
暗闇と死の陰に座している者たちを  
照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」

(ルカによる福音書 一章七八、七九節)

今年も十一月に入るとクリスマスの準備があちこちで始められ、寒い冬の日に温かなひとときを待ち望む人々の思いが感じられます。クリスマスを祝う人たちの多くは、おそらくおいしい料理やプレゼント、また友人や家族との交流に温かさを求め、それを楽しみにしているのでしょう。それはそれで素敵なことですが、それが一時的な温かさに終わらず、持続するものとなるためには、クリスマスの本当の意味を

知っておく必要がありそうです。

クリスマスは、ご存じのように、イエスキリストの誕生を祝うときです。しかし聖書のイエス誕生についての記述を見ると、必ずしも喜ばしく温かい言葉に満ちているわけではありません。「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、…身分の低い者を高く上げ」とか、「光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし…」といった表現でイエス誕生の意味が語られています。クリスマスというのはつまり、明るく元気に生きている人間が楽しく温かいときを作り出すというものはなく、逆に「暗闇や死」の中にある人間、苦しんでいる人間に温かい光が与えられるときであると言われているのです。

イエスは「神を愛し、隣人を愛する」ことを教えました。私たちが生きている世界は、残念ながら愛の成就された世界ではありません。むしろ、それとは逆に、人が互いに傷つけあい、信頼関係を築くことの難しい世界だといえるでしょう。人間の心の闇に覆われたこの世界で、しかしその闇をよく見つけ、そして何よりも自らの闇をよく見つけ、それを苦しみ、悲しく思う—そのように謙虚に人間の現実に向き合い、

それを受け止めることのできる人が、心の底から光を求め、そのような人にこそ光が訪れるのです。

イエスの宣教の最初の言葉は「悔い改めよ」であつたと聖書は記しています。自分の闇から目を背けることなく、それを痛み、そこから脱したいと願う、そうして人が人間の現実を超えたところへ目を向け、真実を求めるとき、その人は闇を脱し、光の中を歩き始めるのです。なぜなら、深く悔い、神を仰ぐことによって、人は自らの思いから解放され、本当の意味で人を愛すことができるようになるからです。この愛の光はやがて周囲にも伝わり、その中で人と人の間に信頼に満ちた関係が築かれ、平和の道が開かれてゆくのです。

クリスマスはしたがって、改めて自分を見つめ、闇に光が訪れることを祈り、イエスによってその可能性が開かれたことを感謝するときといえるでしょう。今年のクリスマスが、光の温かさとも美しさを感じられる良きときとなることを願っています。

# 各キャンパスのメッセーજ

## Izumi

泉キャンパス

大学宗教主任

野村 信



クリスマスおめでとうございます。今年も、主イエス・キリストの誕生をお祝いするクリスマスの時期を迎え、皆さんと共に祝いできることを嬉しく思います。大学に来て初めてクリスマス礼拝に出席する人も、何度か出席する人も、この時期、心から喜び、満足できる時となりますようにお祈りしています。

クリスマスはなんと云っても、「光がとても気になる時です。季節としては夜が長くなる中で、冬至を境に今度は昼が長くなり始めますが、この時季に、キリストの誕生を「光」として祝うことは、格別に意味があると思います。聖書には、キリストが誕生するはるか以前にイザヤの預言を記しています(九章一節)。

闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。太陽の光を超えて、いや太陽の光も含んで、神からの「大いなる光」が世界に輝きました。この喜びをぜひ知って、クリスマスのまことの喜びを共に分かち合いましょ。

## Tagajo

多賀城キャンパス

大学宗教主任

原田 浩司



去年のクリスマス・イヴのことです。ミヤギテレビの情報番組「OH!パンドス」で、多賀城キャンパスのイルミネーションと礼拝堂のパイオルガンの取材があり、その様子が生中継されました。多賀城から、クリスマスの意味とパイオルガンの音色を多くの人々に届ける、とても良い機会となりました。

今年もクリスマスの季節を迎えました。世間では早くも十一月上旬からクリスマスの飾り付けを始めたお店が目につくようになりました。競争競技種目で使われる「フライング」の時期が年々早まっているように感じます。

キリスト教では「アドヴェント(待降節)」と呼ばれる、クリスマスを迎えるための特別な準備期間があります。今年も十一月三十日から始まりです。「待」の文字があるように、じつくりとクリスマスの意味を噛みしめながら、焦らず慌てずに、この季節を過ごしていきましょう。

## Tsuchitoui

土樋キャンパス

大学宗教主任

出村 みや子



教会の暦、教会暦では十一月三十日の日曜聖日から待降節に入りました。キリスト教国ではない日本でもクリスマスは冬のイベントとして定着し、街を彩る光のイルミネーションは寒い冬の季節を過ごす私たちの心を温かくしてくれます。英語のアドヴェントは、「到来」を意味するラテン語Adventusに由来し、神の御子イエス・キリストの誕生を祝うクリスマス前の四番目の日曜から始まる準備の期間です。聖書のクリスマスの記事を見ると、イエス・キリストの降誕の意味が様々な角度から語られていることに気づきます。ヨハネによる福音書の冒頭には、「言のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」と記されています。学生の皆さん、ぜひこの季節に聖書を手に取り、暗闇を照らす光としてのイエス・キリストの到来の意味について考えてみてください。

## 「クリスマス」って何ですか？

クリスマス(キリストのミサ)とは、イエス・キリストの誕生を祝うためのミサ(典礼もしくは礼拝)のことです。どうして、イエス・キリストの誕生が、クリスマスとして特別に祝われるのでしょうか。

第一に挙げられる理由は、神が人となられたという出来事だったからです。即ち、被造物の世界において、換言するならば、人間の五感で認知し思考できる世界において、神が人間と出会われた出来事だからです。

第二に挙げられる理由は、旧約聖書の預言者たちが待望していた救い主(メシア)の誕生だったということです。それは、贖いの業(十字架の出来事)によって人間の罪を赦すという救いを実現する神の子の到来でした。ペテロの手紙は、そのことを「(イエス・キリストは)十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」(ペテロ二章一四節)と証言しています。

六世紀の修道僧ディオニシウス・エクシグウスは、聖書に記載されている年代とローマ皇帝の治世年数とを累積対照することによって、イエス・キリストの誕生の年数を割り出し、それを境に歴史を紀元前(B.C. ≡ Before Christ)と紀元後(A.D. ≡ Anno Domini)に分けました。それほどに、イエス・キリストの誕生は画期的な出来事だったのです。

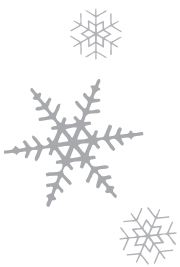
皆さんは、クリスマスをどのように理解しているのでしょうか。それは、クリスマスの日に何をするかで明らかにされます。プレゼントを交換する、みんなで楽しくパーティーをするなど様々でしょう。今年のクリスマスは、東北学院大学の礼拝堂やキリスト教会で行われるクリスマス礼拝に出席し、本当のクリスマスの意味を体験していただきたいと思います。

## なぜ12月25日がクリスマスなのですか？

四世紀ローマ帝国の国教となったキリスト教は、その後ローマ帝国が東西に分裂したのに伴い、ローマを中心とする西方教会とコンスタンチノーブルを中心とする東方教会に分かれました。クリスマスの祝い方においても両者の間に違いが生じてきました。

西方教会(ローマ・カトリック・プロテスタント)の伝統では、三世紀の末頃からキリストの誕生日として守られて来ました。東方教会(ギリシヤ正教系)では四世紀頃から一月六日公現日に降誕を祝って来ましたが、西方教会との調整を経て、十二月二十五日には降誕を一月六日には異邦人への救い主到来を祝うようになりました。

なぜ十二月二十五日なのかについては、古代教会で考えられていた独特の歴史観にもとづく日にちの算定があるようです。また、冬至に近いことから異教の「太陽の誕生」祭に対抗して「義の太陽」(キリスト)の出現を祝ったものであるとも言われますが確かなことはわかりません。ひとつ確実なことは四世紀から五世紀にかけてキリストの受肉と人格に関する論争があり、キリスト養子論の、異端説を退けるために、キリストは神の御子として誕生されたことが東西両教会で強調された事実です。つまり、クリスマスを十二月二十五日に祝うということとは「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」(ルカ二・十二)という、神の御子が人間の形をとり(受肉)、私たちの近くにおいでになったことを意味します。



へ世界各地のクリスマスへ

## オランダのクリスマス

野村信

個人的なことであるが、オランダとは縁が深いらしい。祖父、杉田虎狐獅(ごしろ)は、早稲田の商科第二期生の時に植村正久牧師(1857-1925)から受洗したが、植村は米国のオランダ改革派の宣教師たちが活躍していた横浜バンドの出身で、祖父もこと関わったらしい。私が若き日に留学した先は、オランダ人たちの移民で占められた米国のミシガン州のホランダ市であり、自分の信仰的なルーツを確認し、さらに彼らの働きに対し当時出席していた教会で謝辞を述べたことがある。その後、オランダ本国へは八回出かけた。二〇〇八年には、一年間アムステルダム自由大学で研究生活を送った。今も、オランダの人々とは何かと交流がある。彼らの生活や文化は良く知っているつもりであるが、今回は、時節から米国のオランダ人のクリスマスとヨーロッパ本国のオランダ人のクリスマスの様子について記しておこう。

米国のクリスマスは静かで美しい。都会では様々なクリスマスの過ごし方があるかもしれないが、総じて一般市民の居住空間、どちらかと言えば地方の生活では、庭や街路樹をクリスマス用の電飾(イルミネーション)で飾り、庭先にはマリアとヨセフに見守られた幼子の降誕の模型が置かれる。待降節(アドベント)になると二斉に電気が灯り、雪の積もる夜の街にクリスマスの訪れを告げる。町全体の造りはゆったりとしているので、車でドライブしていると、どの通りが華やかな飾りをつけているかが分かり、お気に入りのコーズまで出てくる。なるほど、この時期にどの通りが一番美しいかのコンテストがあり、確か、私の住居の近くでは、三十二番街が一番綺麗だという噂があったことを耳にしたことがある。

米国のオランダ市は、ミシガン湖の東海岸にあり、オランダ改革派と呼ばれるキリスト教徒たちが多く居住する地域である。車で数分走るたびに十字架や尖塔が見えるほどあちこちに教会が立ち並び、十二月二四日のクリスマスイブにはどの教会も讃美の歌声で満ちている。子供たちは、翌日開封できるサンタクロースからのプレゼント

トを楽しみにしつつ床につく。翌二五日のクリスマスにも礼拝があり、人々は教会へ集う。それも多くの会社や学校は、二四日から一月一日まで、クリスマス休暇に入り、二五日の礼拝に人々は支障なく出席できるからである。こうして、すっかりクリスマスの楽しい季節となり、あちらこちらでパーティや催し物が行われ、家族や友人たちと楽しく、親しい時間を過ごして新年を迎える。

オランダ本国でのクリスマスは、米国のクリスマスほど静かで、美しいという趣はなかった。確かに、駅や、主要な通り、商店街は、美しいイルミネーションで飾られているが、ヨーロッパという狭い地域にひしめく居住空間だからであるうか、「森閑として、透明な夜」を迎えるという気分にはなれなかった。ただし、公共の施設が工夫を凝らして、クリスマスの装飾で室内を飾り、音楽会、美術展、催し物を様々に行っていった。研修中の私としては、のんびりクリスマスを楽しんでいる暇はなく、もっぱらアムステルダム公共図書館に入り浸っていたのだが、館内の中々に大きく輪の状態でひるがる柵(ひいらぎ)の緑の枝に、直径十五センチほ

どの真紅の輝くボールがたくさん付いた飾りに、しばしば見とれ、室内の白さと緑と赤の良い色合いにクリスマスの喜びを感じたものである。

総じて、外国でのクリスマスは、日本とどのように違ったのかと振り返ると、あまりノーマン・シャリズムがないというところが、クリスマスの意義を感じさせてくれたのかもしれない。街角でシングルベルが鳴り、クリスマス・ケーキが飛ぶように売られていくクリスマスとはかなり趣が違おうようだ。それでも、やはり私は日本人。正月も楽しんで、といういささか欲張りな楽しい時をこの時期過ごしている。





